

ヒト組織検体を 有効活用するための技術革新

2025. **01.08** WED 16:00-17:30

現地
開催

参加無料
事前申込制

現地会場：鳥取大学医学部米子キャンパス内 臨床講義棟421講義室

講師：井上 正宏

京都大学大学院医学研究科クリニカルバイオリソース研究開発講座 特定教授



近年の医学生物学研究における様々な技術革新は、ヒト組織検体の重要性を浮き彫りにしました。同時に動物実験を自粛することは世界的な潮流となり、医薬品の開発においてヒト組織検体の解析とモデル化はますます発展していくものと考えられます。

がん医療においては、がんという疾患の多様性と可塑性が明らかになってきました。同一の病理診断名でも、治療に対する応答性は患者間で異なり、進行や治療でその性質を変化させます。多様性の研究は、パラフィンブロックや凍結組織、核酸の抽出物の蓄積がありますが、いずれもスナップショット的な情報で、可塑性はスナップショットの再構築でしか解析できません。近年、オルガノイド培養法が開発され、より高い成功率で初代培養や継代が可能になりました。がんオルガノイドは可塑性を含め患者がんの特性を保持しており、がん細胞の応答を評価するモデルとして優れています。バイオリソースとして樹立したオルガノイドを凍結保存して「オルガノイドバイオバンク」とする試みが広く行われていますが、課題点も多くあります。

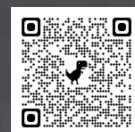
これまで組織の細断はメスとハサミ、物理的な「すりつぶし」でしたが、挫滅による組織損傷が激しく、微量検体からのオルガノイド調製は困難でした。我々の開発した新たな組織細断法では、迅速、容易に、挫滅を最小限にしてヒト新鮮組織検体を300マイクロメートル厚の組織片に細断できるようになりました。検体を細断して保存することは、希少疾患などの検体の利用機会を向上させ、また、細断した組織は、培養可能な状態で4℃及び-80℃以下で低温保存できます。さらに、検体によっては酵素処理を必要としないオルガノイド調製も可能です。この組織細断法は、広くバイオリソースの有効活用に変革をもたらす可能性があります。

申込

<https://forms.gle/7xDeurVxuhJsFrnG7>

「QRコード」または「お申込みフォーム」からお申込ください。

申込多数の場合、参加人数を制限する場合があります。参加希望がかなわない場合はご容赦ください。



連絡先：公益財団法人鳥取県産業振興機構バイオフィロントニア推進室（担当：森山）

〒683-8503 鳥取県米子市西町86（鳥取大学米子キャンパス内）

TEL (0859)37-5131 Mail tbf@toriton.or.jp ホームページ：<https://www.bio-frontier.jp/>

共催：公益財団法人鳥取県産業振興機構バイオフィロントニア推進室、公益財団法人鳥取バイオサイエンス振興会